

私たちのすすむ道とその役割

星霜移り、はや18年。百名にも足りない人数で運動もままならない状況から県平和委員会を再建してからの「花も実もある」歳月でした。今日の会員1000名、37の平和委員会擁するまでになり県内各地で活発な平和運動が展開されている状況を誰が想像できたでしょうか。それは、運動・組織・財政という3つ課題の方針が基本的正しかった事。それを裏付ける「みんなで知恵を出し合い・みんなで実践」という運営にあったといえます。

いま新たな発展段階にきているように思えます。県大会を契機に平和委員会の羅針盤＝運動の基本方向をみんなで考えて見たいと思います。

1. 第1段階の時期：1000名をめざして

1991年12月に再建された県平和委員会は、続く10年間位は1000名の会員をめざして全力投球。その頃の合言葉は「高層ビル建設には基礎工事が大切」という事で運動よりも組織の拡大が中心でした。1年間に100～200名という仲間づくりでした。1000名達成後、更に5年後に1500名という「ジャンボ計画」は見事に失敗。深刻な反省と教訓を経験しました。

2. 第2段階：地域草の根運動の前進

会員1000名実現前後から茨城でどんな平和運動を進めていくかという本格的な運動論が展開されました。その結論は「地域から平和の発信を」という事でした。当時は「草の根運動」という言葉が流行っていましたが経験したことが無いので暗中模索でした。各平和委員会には「平和ツアー・学習会など何でもいいから好きな事をやってもらいたい」と言った事が思い出されます。それから8年。春の憲法記念日・平和行進、夏の戦争と平和を考える特別旬間・原水爆禁止世界大会、秋の県内一斉宣伝行動・市民集会・意見広告掲載、冬の百里初午まつり等々を実施。これらの県段階の活動とは別に各平和委員会が多種多様な年間行事を行っています。これまで広がった県内の平和運動は後にも先にもなかったと確信を深めてもいいかと思えます。

3. 第3段階：本格的な地域活動と平和運動の構築

地域で本当に平和運動という事になれば、平和委員会だ

けでは出来ないというのはこれまでの経験で理解されています。平和という課題は全ての運動団体に共通するものです。

各平和委員会は地域で色々な団体が手を取り合って意識的にすすめる事が求められています。土浦などでは進んだ経験を積んでいます。この地域での共同を土台に県段階の集会や運動の共同をつくり上げていく。そのために力を発揮する。ここに平和委員会の大きな役割があるのではないのでしょうか。大いに議論をしていきたいと思えます。

(伊 達)

<5・3憲法フェスティバル特集>

県民に開かれた価値あるつどい

日本平和委員会 岩月 康範

東京からはじめて参加させてもらいました。茨城でこんなにすばらしい集いが行われていることに驚き、感銘を受けました。

模擬店など20のテントでにぎわい、午前中は、戦争体験を聞く、若者のしゃべり場、九条の会交流会、茨城の戦争パネル展の4つの広場が設けられました。九条の会交流会には16の九条の会から活動が報告され交流しました。

昼からはメインステージで、水戸市内の高校生ジャズバンド約30人の演奏、フォークグループや合唱団のうたごえ、笹山尚人弁護士の講演「人が壊れていく職場」や脚本家松崎菊也さんの自公政治批判のトークと続きました。暑いぐらいの日差してでしたが、1日たっぷり有意義な学びと交流の場となりました。

大型連休のなかの5月3日憲法記念日は、大きなホールで講演などを中心にした取り組みが全国的には開催されますが、こうした多くの人手をかけた大規模なフェスティバルはあまり聞きません。茨城県平和委員会は、4月には各地で署名や宣伝をすすめて、5.3フェスティバルに集おうと話し合ってきました。会場には平和委員会ののぼりや仲間の顔があり、運営でも力を発揮し、フェスティバルの成功に貢献していました。

従軍看護婦

守屋ミサさんの戦争体験を聞いて

平和の会花だいこん 中山弘子

今年の憲法フェスティバルで、以前から聞きたいと思っていた従軍看護婦の方の戦争体験を聞くことができました。

日赤の看護学校を卒業し従軍看護婦となった守屋ミサさんは、多くの若者が軍国少年として戦場に向かったように、「お国のために」と迷うことなく従軍看護婦に志願しました。そして赤紙の召集令状をもらい、20才で遺書を書き遺髪と写真を両親に送り病院船に乗ったのです。命を守るべき看護婦を戦場に駆り立てた軍国教育に怒りを覚えます。戦地では怪我の患者が多いことは容易に予想がつきますが、結核や栄養失調の方が多かったようです。ベトナム戦争やイラク戦争で兵士がPTSDや精神疾患に苦しんでいるように、病院船に収容された兵隊の1割が精神疾患だったそうです。人を傷つけ命を奪う戦争で人間の心は病んでしまうのです。守屋さんは広島陸軍病院で被爆されて、多くの死に直面しています。終戦一ヶ月後の9月17日に広島を襲った枕崎台風は3,756名の死者を出しました。守屋さんのいた広島陸軍病院大野分院は土石流にのみこまれ死者、行方不明者が156名。戦後直ぐの混乱期で気象情報も十分に伝わらず、原爆との二重災害に苦しんだそうです。守屋さんは「広島、長崎の原爆記念館に原水禁世界大会と普段の静かな時の2回訪れてじっくりみてほしい。平和は意識的に守らなければならないものです。」と静かに語りかけてくださいました。平和の大切さ、いのちの重み、そして戦争は音を立てずにやってくることを痛感しました。平和と憲法を守るために行動したいとあらためて思います。

平和かわら版

平和新聞茨城版

発行：茨城県平和委員会

〒310-0912 水戸市見川5-127-281

Tel/Fax 029-251-2806

E-mail ibahei@amber.plala.or.jp

No.533
月3回発行
2009.5.25





「九条の会」 交流会に参加して

鹿行平和委員会 木村 泉

5月3日(日)水戸市千波公園のはなみずき広場で行われた恒例の「憲法フェスティバル」で、九条の会交流会が行われました。当日は朝から快晴で、用意してあったテントに入れない人が出るほどにぎわい、熱気にあふれました。

予定した時間の大半は取り組みの紹介に当てられ、時間枠をオーバーする人が続出しましたが、さまざまな困難を抱えながら、前向きに明るく取り組んでいる経験がたくさん語られました。自分たちの日頃の活動と比較しながら聞くことで、共感がより深まり、さらに元気をもらうこともできました。

「参加した人たちの多くは年配者だ。高校生を始め若い人たちへの接近した経験を聞きたい」という質問も出されました。駅頭での署名活動等で、若い人たちの反応がかなり良かった話や、説明を聞き、自分が署名することは勿論、通りかかった友人を呼び込むなど、協力をもらった経験も出されました。若い人たちに対しては、先入観を捨て、気軽に呼びかけることが大切ようです。

実行委員会では、設立時期や取り組みの概要等について事前のプリント準備の働きかけがあり、資料を目にしながら話を聞いたことも良かったと思います。

さらに、フェスティバル実行委員会代表である田村武夫先生が最後まで参加し、閉会挨拶で、交流会の意義を再度確認できた事も良かったと思いました。

憲法フェスティバルに参加して

荳崎九条の会 野口久寿美

一昨年から取り組んで来た憲法フェスティバル参加、今年「平和の会」と一緒に、出来ればマイクロバスをと計画はしたのですが、参加希望6名、結局Kさんのマイカーで参加することになりました。

当日は余裕を見て8時30分に出発。ところが、常磐道が高速料金割引効果で予想外の混みよう、10時30分過ぎ漸く会場に到着でした。

早速、中央舞台の前に陣取って、「戦争体験」を聴きました。3人の方がお話しになりましたが、実際聴けたのは、従軍看護婦だった方と、人間魚雷「回天」の操舵訓練に関わった方のお話でした。二人共現在のお住まいはつくば市と土浦だそうです。荳崎九条の会として、今年はお二人の体験を聴く機会を何とか作りたいものだと思います。

話は変わりますが、5月10日付けの「赤旗日曜版」に、東京日比谷の憲法集会の様子が報じられ、その片隅に「改憲派の嘆き」なるコラムが掲載されていました。改憲派も「九条の会」に対抗して、草の根運動を強化しているが、彼らが思うように世論は変わっていないという趣旨でした。

私たちが参加した「憲法フェスティバル」も改憲派を嘆かせる砦の一つです。鬼が笑うかも知れませんが、来年こそはマイクロバスで参加したいものだと考えています。



「茨城の15年戦争」 パネル展を担当して、

那珂市平和の会 川又 俊水

私は「茨城の戦没者等の状況（戦没者数5万3千名）」は戦死した地域および出身地区等を調べてあったが、「茨城の戦災」を改めて見直してみると、大津町（北茨城）

風船爆弾の作戦本部があった箇所、阿見・土浦海軍航空隊一帯「予科連」航空隊が配備されていた箇所、軍事工業都市として発展していた日立・勝田等は特に激しい攻撃が大規模に加えられ、壊滅状態になったことが判りました。

風船爆弾について

「神風特別攻撃隊」の攻撃がはじめて行われた1944年10月25日、「ふ」号作戦に関する大本営命令がくだされた。

陸軍が開発した気球は、良質の和紙をコンニャク糊で5～6枚張り合わせた原紙に強化処理を施したもので、当時手に入る材料のなかでは一番すぐれているといわれる。

気球の中に詰められた水素ガスと重りで調節を行い、高度を維持する装置が取り付けられ、アメリカ大陸に到達したところで自動的に爆弾を投下するしくみになっていた。いわば当時最高の技術を結集して開発したハイテク兵器であった。

1944年11月から翌年の3月までの間に約9300個の風船爆弾が放流され、うち360個が北米に到達したといわれている。オレゴン州では不発弾爆発により6人が死亡した他、原子爆弾製造工場の電線に風船爆弾が引っかかって3日間操業停止したなどの影響が出た。オレゴン州の公園には記念碑が建っている。

シャキルさんの平和講演と交流のつどい

終わらないイラク戦争

イラク人医師 モハメッド・ヌーリ・シャキル

6月6日(土)18:00 筑波大学春日キャンパス
(旧図書館情報大学)

6月7日(日)14:00 県南生涯学習センター

一般1,000円 学生300円

主催：賢謙楽学（筑波大学）/ニコエコデコ

Tel 029-823-7930 FAX029-822-1341